園長だより

さゆりっ子

令和５年１２月　１日

Ｎｏ８

文責　若林一成

「あと３０センチ」

～岩川直樹先生（信濃教育会教育研究所特任所員）の講演より～

先日、清泉女子短期大学の学生と左の写真からどんな子どもの声が聞こえてくるか、想像し合いました。

⬅ の子：ちゃんと止まってるよ。
あと少し!先生、早く前向いてよ。

➡ の子：早く「だるまさんがころんだ」って言ってよ。
動かないぞ～。

➡ の子：あっ!ちょっと動いちゃった!!
（笑顔でピクピクしている男の子）

私はてっきり ➡ の子が気になってたくさんの言葉が寄せられるだろうなと思っていましたが、やってみると学生たちはいろんな子どもの声を聞かせてくれました。➡ の子のつぶやきにはみんなが笑顔になりました。

講演「相手になることで生まれる教育の探求　～あと３０センチ～」から一部抜粋

教室でうなり声をあげる子どもがいれば、「障害」があると見える。ほかの子どもから離して職員室で自習させたりする。

しかし、あと三十センチ近づいていたら、脇をぎゅっと固めて暴発を必死にとどめようとするその子の姿が見えたかもしれない。

ああ、こんなにこらえていたのか。そう感じられたなら、「よくがまんしたね」とみんなの前でその子を承認したくなる。

教室で帽子をかぶったままの子どもがいれば、マナーがなっていないと見える。「部屋では帽子をとろうね」とヤサシク指導したりする。

しかし、あと三十センチ近づいていたら、帽子の下のその子のこわばった顔が見えたかもしれない。

ああ、こんなにおびえていたのか。そう感じられたなら、その子が安心できる教室をどうにかしてつくってゆきたくなる。

教室で規律を守り、勉強もできる子どもがいれば、なんの「問題」もないと見える。「ほんとうに手のかからないお子さんで」とほめそやしたりする。

しかし、あと三十センチ近づいていたら、いつでもどこでも同じ笑顔の仮面の向こうからその子の叫びが聞こえたかもしれない。

ああ、こんなに感情を押し殺しつづけていたのか。そう感じられたなら、その子がやさぐれた台詞をぶちまけられる音読の授業に挑みたくなる。

あと三十センチ。しかし、それがやけに遠いのだ。

あと三十センチで生まれるコンタクト。学校は、そこを起点にしてあらゆることを問い返す、探求のるつぼであっていい。

他者を操作し自己を防衛する技術の鎧を身にまとうことが「有能」と見なされるこの時代、わたしたちはその鎧を脱いで肌をさらそうとしないかぎり、ふれることも、ふれられることもできない。

たとえ「未熟」でも、相手にふれ、ふれられる肌の感触のほうから、その子どもの葛藤や格闘に応える学びを共に探り合ってゆくこと。

「あと30センチ」
＝「どうしよう」⇒「どうしたの」

「どうしよう」、と思っているとき、重心は自分の側にある。
「どうしたの」、とその重心が目の前の子どもに動くとき、
それによって、はじめて生まれる
この授業の、この教室の、この学校の、この社会の問い直しがある。
子どもへの重心移動から生まれる問い直し（ reflection ）にこそ、
教師の専門性の奥行きがある。

あと30センチ

相手になるまでの距離、いや、
相手になろうとする人間の動き、
相手に向かい、相手を迎え、
相手を感じ、相手に応えようとする、
からだの、ことばの、私の存在そのものの･･･

「相手になる」って、どんな動きのことだろう？　先生の講演は子どもを目の前にした大人、先生へ更に問い続けていきました。

○「相手になるとは」目の前の子どもを＜対象＞と見ることとは当然違う。
○「相手になるとき」、大人の心の重心移動があり、子どもとの相互的な関係性が生じる。
○子どもと大人が「主体どうし」の関係ができることで子どもと共に同じ方向を見て、求めていくことができる。「指導しよう」とする関係性では子どもと同じ方向を見ることはできない。

私たちは子どものことを知ろうとその行動、仕草、言葉を追いかけます。それはまだ「対象」の段階です。同じ方向を見ようとするなら「ああ、いいな」と感じる場面に立ち止まること、「なんか」と気になった場面に立ち止まること、そして語り合うことで、その意味を見つめ直すこと、そこからまた子どもの世界に返っていくこと。子ども同士がつながり合っている世界に少しでも近づき、分かち合おうとすることが、「子どもの探究」の一番大事なことであるように感じました。

＜お知らせ＞

例年、紙ベースで実施してきました「保護者アンケート」ですが、本年度より「Google フォーム」で実施します。12 月４日（月）にレーザーキッズの「お知らせ」にてリンクを送りますので、１２月１１日（月）までに入力をお願いいたします。

冬芽（１１／９）

寒さが訪れると一気に落ち葉の勢いが増す。幼稚園のモクレンもすっかり葉が落ちてしまったなあと思いつつながめてみると、枝の先には１ｃｍもあろうかと思える見事な冬芽があった。今まで色づいてきていた葉たちに隠れてほとんど見ることができなかったが、どの枝の先にもしっかりと成長している証が見られる。細々とした枝、鉛筆より太い枝…どれにでもある。色づいていった季節の移り変わりの中で着実に大きくなってきてことをちっとも気づかないでいた。毎日出会う子どもたちも大人が気づかない、気づけないほんの少しずつの成長を毎日続けている。あふれんばかりのエネルギッシュな子どもたちの姿からその成長を想像することは容易であるが、具体にするのは案外難しいかもしれない。子どものことを語り合う中にそのヒントがたくさんあるようにも思う。楽しい会話が弾む仲間たちでありたい。